

46. グループホーム入所者における認知症行動障害尺度と運動能力との関係

医療法人社団 田村クリニック

○寒川貴雄(RPT), 荻田晃恵(RPT), 大矢浩司(OTR), 田村美和(MD)

【はじめに】

当院関連施設のグループホームで、入所者の運動量の減少や、グループホーム・スタッフの入所者への介助量の増加が問題になった。

そこで、当院のリハビリテーション・スタッフが、レクリエーションや集団運動療法を行うために介入することになり、各種初期評価を行った。その結果、グループホーム入所者における認知症の周辺症状を捉える評価表である認知行動障害尺度 (Dementia Behavior Disturbance Scale : 以下, DBD) ¹⁾ と運動能力との間に一定の知見を得ることができた。

そこで今回、DBD と運動能力との関係について若干の考察をまじえて報告する。

【対象と方法】

対象は、当院関連施設のグループホームに入所中の立位保持・歩行が可能であり、我々の検査に対して拒否のなかった7名 (男性2名, 女性5名, 平均年齢 85.9 ± 3.0 歳) とした。尚, 対象者もしくはその家族に、検査結果を学会などで報告する旨の同意は得ている。

方法は、対象者の DBD は、グループホーム内のスタッフが調査記載した。歩行能力として、10m歩行速度、Timed Up & Go test (以下, TU&G) を測定した。足趾のピンチ力をOG技研製 ISOFORCE GT305 を用いて座位にて測定した。バランス能力として、静止立位下肢荷重、重心動揺をアニマ社製 GRAVICORDER G-620 を用いて測定した。

測定結果を元に、統計学的な有意水準を5%未満として、主成分分析および、DBD との相関関係について分析した。

【結果】

DBD との相関関係が認められたものは、表1の如くであり、図1~4に示した。また、重心動揺の開眼時Y方向動揺平均中心変位は、前方重心群と後方重心群とに分けられた。

その他の項目で、DBD との相関関係は認められなかった。

表1 DBD と相関関係が認められた運動能力

DBD と相関関係が認められた項目		相関係数	
10m歩行速度(秒)(図1, 実線)		r=0.807	
TU&G(秒)(図1, 破線)		r=0.676	
重心動揺 (開眼時)	外周面積(cm ²)(図2)	r=0.718	
	Y方向動揺 平均中心変位(cm)(図3)	前方重心群 (n=4)	r=0.911
		後方重心群 (n=3)	r=-0.988
静止立位下肢荷重の左右差(%)(図4)		r=-0.741	

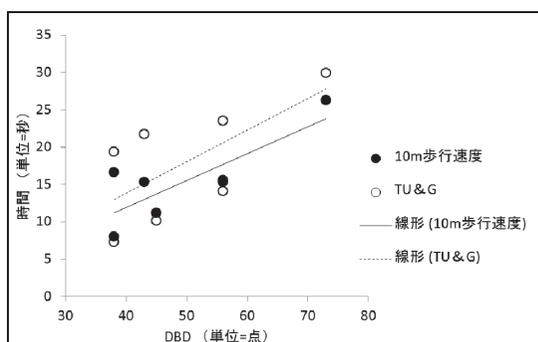


図1 DBD と 10m 歩行速度・TU&G

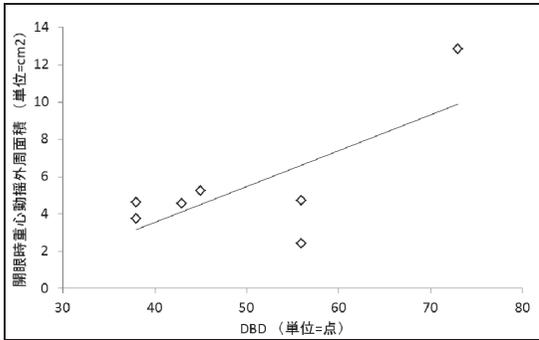


図 2 DBD と開眼時重心動揺外周面積

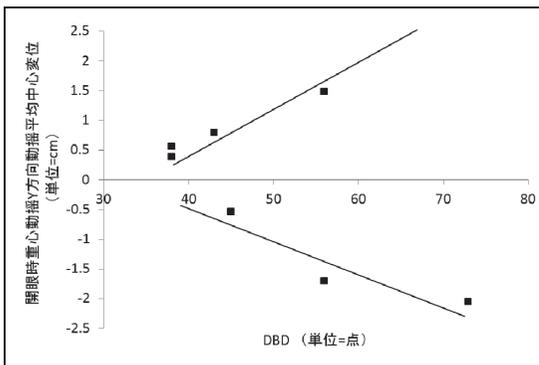


図 3 DBD と開眼時重心動揺 Y 方向動揺平均中心変位

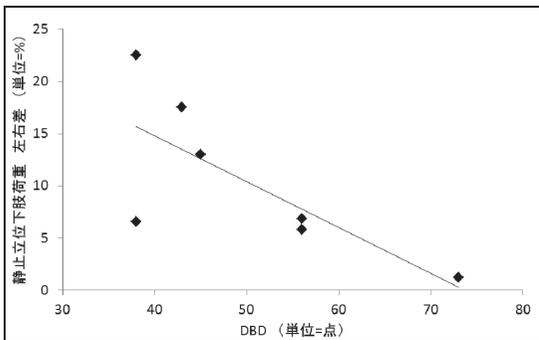


図 4 DBD と静止立位下肢荷重の左右差

【考察】

今回の結果から、認知症を発症している場合、周辺症状の出現が顕著となるに従い、運動能力が低下する可能性が示唆された。

運動能力が低下していると、転倒の危険性

があることは知られている。すなわち、DBD の高得点者は、転倒の可能性が高くなっており、危険性が増していると思われる。このことは、見守りや介助という介護者の介護負担が増加するのではないかと考えられた。

以上のことから、運動能力を上げることによって介助量の軽減が図れるのではないかと考えた。運動能力の向上を図る方法としては、椅子からの起立、着座が下肢筋力の筋活動を上げるという報告²⁾がある。このことから、椅子からの起立、着座を繰り返すという運動課題を行うことで、下肢筋力の向上、さらにはバランス能力を改善させ、運動能力の向上が可能なのではないかと思った。さらに、運動能力の向上が脳機能の向上につながるという報告³⁾から、周辺症状の軽快につながるのではないかと考えられた。

【まとめ】

グループホーム入所者 7 名(男 2 名, 女 5 名)に対して DBD の調査と運動能力について検査を行った。

DBD の点数が高くなるに従い、バランス能力の低下・歩行スピードの遅延がみられた。

認知症を発症している場合、周辺症状の出現が顕著となるに従い、運動能力が低下する可能性が示唆された。

【文献】

- 1) 溝口環, 飯島節, 江藤文夫, 石塚彰映, 折茂肇: DBD スケール(Dementia Behavior Disturbance Scale)による老年期痴呆患者の行動異常評価に関する研究. 日本老年医学会雑誌 1993;30:835-840
- 2) 森貫徹, 武政誠一, 中川法一: 虚弱高齢者の起立・着座動作における下肢筋活動の検討. 神大院保険紀要 2008;24:17-28
- 3) 井出幸二郎: 高齢者の身体運動と脳の可塑性. 体力科学 2010;59:60